



# IUFRD NEWS

No. 54 (1995.3)

## 北京でユフロ理事会が開催される

東京農工大学 木平 勇吉

1994年10月4日から8日まで北京で中国林業試験場と北京林業大学を会場として第30回ユフロ理事会が開催された。理事や来賓30名が22カ国から参加した。ここでは、第20回ユフロ総会（フィンランドのタンペレ）を1年後に控え、その準備を進めるために26件の議題が検討されたのでその要点を報告する。

### 熱意あふれる中国

理事会の第1日目は林業試験場で、中国林業大臣の歓迎の挨拶で始まった。試験場長、林業省次長をはじめ、林業行政と研究機関の幹部が出席し、中国の森林政策と林業の現状が報告された。「中国では森林の多目的な利用が期待され、特に北方域での砂漠化進行の防止が進められている。そのため毎年5百万haの造林が行われ、現在国土の14%が森林となり、西暦2000年には15.3%に達する見通しである」と森林回復への国の強い意欲が示された。続いて、西暦2000年に予定される第21回ユフロ総会を北京へ誘致することに中国政府は全力を尽くすと明言された。北京滞在中に理事は総会会場に予定される北京国際会場へ案内され、その超近代的で大規模な設備に驚かされた。

林業試験場長からは、試験場は1958年に創立された唯一の国立総合研究機関で、下部機関として12研究所と4つの実験センターをもち、熱帯林の保護から寒冷砂漠地域の緑化までの広い分野を担当していること、教授84人、助教授・上級技官367人を含めて総職員数は4172人であることなどが説明された。中庭ではユフロ記念植樹も行われた。

第2日目の理事会会場となった北京林業大学では、学

長、副学長以下主任教授が出席した。現在60人の教授が3000人の在籍生を教えており、完成したばかりのホテルのような校舎や研究施設に案内された。公式の歓迎・送別晩餐会を含め、行き届いた主催者側のホストぶりには、国際舞台への中国の熱意が感じられた毎日であった。

### テキパキとした26議題の討議

1年に1回開かれる理事会には議題が山積みされている。まず、理事会の前日に取り扱う議題と討議のスケジュールの調整が会長を中心に「政策・計画委員会」で行われる。それに基づき全体会議で議題の要点が提案され、詳細な検討は内容によりプログラム委員会と管理委員会にゆだねられる。その他に役員選考、表彰、開発途上国問題、長期戦略など特定の課題を持つ委員会が必要に応じて活動する。それらの検討結果は全体会議で承認されて決定となる。この手続きにより今回、26件の議題を3日間でまとめるのは相当に強行軍であった。そのあいだに、試験場や大学の見学、研究紹介、さらに社交行事が行われた。

全体会議では会長（Salleh, マレーシア）から総括報告と課題の提示、プログラム担当副会長（Burley, イギリス）、管理部門担当副会長（Cayford, カナダ）、財務（Schmithusen, スイス）、事務局（Schmutzenhofer, オーストリア）から担当の課題について説明された。経常的な課題の他に、特に「ユフロのあり方」に関する戦略（Strategic Plan）について議論が始められ、次のマドリード理事会で原案作成すること決定された。すべて検討された結果は「決定」あるいは「次回へ継続」とし



林業試験場でのユフロ記念植樹

でテキパキと結論づけられ、実行されている。議題の中で特にユフロ-J 会員に興味ある点を以下に説明したい。

#### 準備万端のユフロ総会（フィンランド）

8月にフィンランドのタンペレで開催される第20回ユフロ総会の準備について検討した。フィンランドから組織委員長（Seppala）や副委員長、総務が出席して詳細報告があったので要点を簡潔的に列記する。

- ・現在の予備登録者は2000人である。収容可能人数は3000人であるので先着順に受け付けを行う。
- ・総会への登録要項（Information Package）は今年の1月末にユフロニュース No 4として発行され、配布される予定である。世界中の多くのメディアが注目しており、例えばTIMEがIUFRO総会について特別報告を企画している。
- ・総会のプログラムは登録要項に記載される。部会ごとにその準備進行に差があるので、1994年11月までに部会長は最終プログラム案を提出することが求められた。
- ・会場の部屋割りについて、部会間の増減はあったが全体として必要数が確保できた。
- ・講演集の1巻は招待発表とポスター発表の要旨、2巻は部会共通の代表発表の全文、3巻は大会報告、として構成される。
- ・宿泊関係の情報は登録要項と一緒に配布され、それに詳しい。料金は予告されたより低めに設定されるがフィンランド通貨は強くなりつつある。（1 US\$ = 5 FIM）
- ・参加費用助成（主に途上国）に対して333人の応募があり、その中から約200人に対して70万ドルが配分される予定であり、その選考基準が示された。
- ・総会期間中の旅行、総会後の旅行（18コース）、同伴者

プログラムは前回予告のとおり準備が進んでいる。内容は登録要項に載るので先着順に受け付ける。

この総会に関して理事会プログラム委員会では次の点を確認した。

- ・ユフロ理事会を8月4日5日にヘルシンキで開催（3日に到着、6日にタンペレへ出発）
- ・総会の開会式、閉会式、小部会での発表は英語で行われ、ユフロ公用語に翻訳される。部会（Plenary Session）では英、仏が使われる。
- ・国旗について、会場内部にはスペースはなく、会場前の公園に掲げる。ただし国旗儀式はしない。
- ・国際評議委員会は第1回が8月8日に開かれる。植樹行事、レセプションには参加費助成受領者も招かれる。第2回は8月12日に行われる。
- ・服装について、これについて、さまざまな意見があったが結論は「それぞれの場にふさわしい服装」という表現となった。この表現の内容について私たち日本人は開会式、閉会式、レセプションなどでは服装には十分に気をつけた方がよいと思う。

#### ユフロの部会改組きまる

ユフロ組織は前回の総会で第4部、第6部がすっきりと再編されて、特に第6部の活動が活発になるという効果をあげた。今回は第1部と第2部である。両部会にかかわる分科会、研究者の数が非常に多くなり、大きくなりすぎて身動きが悪くなったことが理由である。2年間にわたる内部検討の結果、次のように両部会をそれぞれ分割し研究領域を明快にすることになった。新しい部会の細部構成の原案が出来た。

#### ユフロの新しい部会構成（変更部分のみ）

Division 1	Silviculture
Division 2	Physiology and Genetics
Division 7	未定（仮）（Interaction of stress factors with forest trees）
Division 8	Forest Environment

#### ユフロ賞の候補者選ばれる

5年に1度の総会で与えられるユフロ賞について表彰委員会から選考経過と候補者、その受賞理由が説明され、理事会で受賞者が決定された。世界各国から50人が推薦され、その中から次の10人が選ばれた。

- 1, Saddler, Canada ; 2, Mohmod, Malaysia ; 3, Kremer, France ; 4, Mrs. Gjedjernet, Norway, 5, Ugalde, Costa Rica ; 6, Innes, Switzerland/UK ; 7, Mrs Stenberg, Finland ; 8, Mrs. Milar, USA ; 9,

Spiels, USA ; 10, Yang, China ;

西暦 2000 年のユフロ総会開催地は

これについて中国（北京）が正式に理事会で候補を表明、マレーシア、台湾が非公式ではあるが誘致の意向、その他にブラジル、南アフリカが検討中である。次回スペインでの理事会で検討され、ヘルシンキで正式決定される予定である。

先に述べたが、中国側の熱意と組織力は他の候補地を圧倒しているのが現状である。

北京の印象

ユフロ理事会そのものは議題と社交日程できつい。しかし、多くの友達と再会し語るの楽しい。わずかではあるが自由時間は少人数で北京料理を楽しむことが出来た。大半の参加者は夫人同伴、それだけに賑やかである。市内の名所や万里の長城を訪れたのも印象深かった。開放経済の中で北京は活気にあふれていた。実はユフロ理事会は天安門事件の直後に予定されていたがキャンセル

になり、今回初めて中国を訪れた。私は新しい中国のよい側面だけを見たのかも知れないが良い印象を持ち、親しみを深めることが出来た。理事会後の国内旅行では中国のさまざまな生活を知ることが出来たのであろうが、私は参加できず残念だった。北京は是非、もう一度訪れたいまちである。



万里の長城を背にユフロ・ファミリー

## 最近の FORSPA の動きについて

森林総合研究所 小林 一三

FORSPA (the Forestry Research Support Program for Asia and Pacific) という組織があって、バンコックにある FAO の Regional Office for Asia and the Pacific を根拠地にして活動していることをご存知の方は多いと思います。IUFRO 会長のマレーシアの Dr. Salleh や日本林業技術協会顧問の小林富士雄氏など 12 名のアジア・太平洋地域の林業研究分野の著名人による顧問団の影響下でこの地域における森林・林業研究の助成等の活動を 1991 年から続けてきましたが、第一フェーズが昨年 12 月をもって終了しました。現在、そのフォローアップ・フェイズが 2 年計画で動きだしています。

ところで、この FORSPA 以降をどうするかについての重要な会合が 1995 年 2 月 20～23 日にインドネシアのボゴールで開かれます。この地域内の国々の国立林業研究機関の長の集いを CIFOR との共催のような形で開催し、アジア・太平洋地域の林業研究について広く意見を

交換して、この地域の林業研究機関協会のようなもの (Asia-Pacific Association of Forestry Research Institution) の設立を討議しようというものです。これは IUFRO のアジア版とも理解できそうな内容とも受け取れますし、IUFRO 本部との関係など深い論議になることは必至です。我々の IUFRO-J の活動とも関わりが生ずるでしょう。本来ならば IUFRO-J のメンバーの皆様は情報を十分流してご意見を聞きつつ行動すべきです。しかし、これに関する FORSPA からわが国への連絡は顧問団のメンバーである小林富士雄氏、または森林総合研究所長へかなりあわただしい日程で入ってきますので、皆様と連絡をとる時間がありません。しばらくの間、様子がわかるまでは森林総合研究所の単独の対応をご承認頂きたく存じます。なお、上記の会議には森林総合研究所の池田海外研究協力官が所長の代理として出席します。

## 持続的森林経営に関するユフロ国際研究集会

東京大学北海道演習林 仁多見 俊 夫

北海道富良野市の東京大学北海道演習林（東大北演）において、1994年10月17日から21日にかけて、森林資源の持続的利用を可能とする経営と利用技術に関するIUFRO研究集会が開催された。会は東京大学、ユフロ研究部会3.02, 3.05, 3.07, 3.08（森林利用の一部）と同4.04（森林経理部門の一部）が主催し、日本林学会、森林計画学会、森林利用研究会、林野庁、富良野市の協賛を受けた。海外13ヶ国からの30名を含む、100名の参加者を得、52件の発表（海外から21件）があり、森林資源の持続的利用に多くの関心が寄せられていることが理解されるとともに、様々な研究について熱心な講演と討議が行われた。

富良野市の研修施設ハイランドふらのが会場であった。受け付け、開会・歓迎夕食会の後、中1日の現地視察検討会をはさんで、前後2日間にわたる研究発表と質疑応答があり、最終日の閉会夕食会を終えて、5日目に解散した。引き続き、希望者が2グループに分かれて道内林業地、施設の視察旅行を1泊2日、2泊3日で行った。折しもユフロ会長Salleh氏が来日中であり、東大北演の視察のために来演されておられ、開会式には同席され、祝辞を頂戴した。

### 講演、研究発表と現地視察検討会

講演初日午前には、山本博一氏（東京大学演習林）が、東大北演で行っている、林分施業法に基づく、天然林択伐施業における施業実験について講演し、森林資源の持続的利用に関する具体的経営アプローチと技術ならびに、実現している高品質の森林の現状について説明した。Sheingauz氏（ロシア経済研究所）が、極東ロシアの森林資源の多面利用について講演した。Whyte氏（ニュージーランド、カンタベリー大学）は森林の持続性を多面的に評価するモデルについて講演した。討議においては、持続性の定義について議論があり、持続性を考える枠組みを明確にする必要があることが指摘された。

午後からは、世界の持続的森林・林業の講演があった。タンザニアの研究者からは、森林資源の持続的利用には土着住民の森林の利用の仕方、程度から適正適度な利用形態、方法を学ぶことが有効であるとの発表があった（Kajembe）。

中日の現地視察検討会は、参加者全員が4台のバスに

分乗して、東京大学北海道演習林の林内に入った。好天に恵まれ、熱心な視察検討、議論が林内で行われた。まず、成長量に見合った収穫を可能とし、林分の質を向上させる選木方法について視察検討し、精密な林況調査の重要性を確認した（写真1）。伐採後2-4年を経た林分においては、弱度の択伐による林況を破壊しない立木収穫は、森林環境の強度の攪乱を引き起こさず、森林の質の維持を可能としていることが示され、針広混交林の美しい紅葉の中、選木の仕方について熱心な議論が続けられた。

全日にわたり、この日のためのような穏やかな陽気で、心地よい小春日和の中、昼食は戸外で談笑しながらいただくことができた。

収穫作業実験現場では、質の高い森林を持続的に利



写真-1



写真-2

用、形成してきた施業実験における高密路網ときめ細かな素材収穫作業方法について検討、議論した(写真2)。集材作業における立木の損傷の低減の努力のみならず、択伐作業においても立木伐採における伐倒方向の指示が林分の品質維持には必要だという意見があった。丸太が積積されている土場では、よりきめ細かい丸太の品等区分を行えば付加価値の向上が可能ではないかと問われ、土場での品等区分の改善の可能性が指摘された。

現地視察検討会を終えた講演第2日目は、技術的な研究成果の発表があった。経営、成長、利用、生態の分野毎に講演、討議が行われた。

フージャー理論による経営、計画手法の研究、樹種を限定した間伐計画、衛星情報の森林計画への利用技術、林分の直径変動等の発表があった。

私は、東大北演の研究成果から、きめ細かな森林施業には林内路網の整備が不可欠であり、ha当り30m以上の高密な道路網があれば、きめ細かな素材生産作業でも事業の採算を合わせる事が可能であること、それ以上の道路密度では1m/haの密度増加によって0.6m<sup>3</sup>/人日の作業能率の向上が期待されることを示した。インドネシアの研究者は、多様な樹種によって構成される熱帯林の生態系を保全するには、人工的な単一樹種の植栽は不適切な状況を形成する恐れがあると講演した(Shulte)。森林の品質の評価と維持のためには、生産素材の品質の検討が必要だという指摘もあった(中村)。また、高品質な樹種の選定や保持、さらにバイオテクノロジーによる系統分化の研究と応用、開発等について講演があった(木佐貫)。

最後には、持続的な森林の利用を可能とするために必要な考え方、考えの枠組みについて講演があり、技術的な、また考え方としての持続性等について議論された。

この研究集会を通じて、計画、技術とそれらを動かす考え方の適切な関係が統合的に形成されなければ、森林を持続的に経営、利用していくことが容易ではないことを再確認できたと言えるのではないだろうか。また、森林そのもの及び収穫利用される資源の質の高さを維持す

ることが、これまでの持続的な森林経営、利用に加えて問われてきており、生物相の豊かさとしての上の多様性や、森林の質、施業の質など、多面的な森林及び利用する側の質という点において、森林を適切に、有効に経営、利用する形が問われていることが認識できた。

#### ポストコングレスエクスカージョン

研究会後に、21日からの2泊3日で、素材生産に関する道内の視察旅行が行われた。旅程は旭川営林支局幾寅営林署管内で大型車両系機械による天然林択伐素材生産作業を視察、十勝南部浦幌で素材生産機械の開発、生産を視察、北見で機械化人工林間伐作業を視察、紋別で機械化人工林間伐作業と、天然林、複層林仕立て施業の視察、旭川の道立林産試験場で高度素材加工林産技術開発研究を視察、というものであった。この旅行においても終始好天に恵まれ、各現場において、地域の特性を考慮した機械と作業を見ることができた。また、付加価値の高い林産加工技術を見ることができた。また、1泊2日で行った森林経営、育種関係の視察旅行は、旭川営林支局幾寅営林署管内で大型車両系機械による天然林択伐素材生産作業を視察後、美唄の北海道立林業試験場の試験研究を視察し、宿泊。次いで、夕張、栗山の新王子製紙株式会社林木育種研究所を視察した。

#### 森林の持続的経営、利用は健全適切な森林観から

機械化による素材生産作業の効率化は、産業としての林業にはなくてはならないことだが、森林経営、利用の持続性さらには質の観点からの検討が必要であり、地域的な、また国民的な森林に対する「価値観」、適切な「見方考え方」が求められている、ということ、研究集会・エクスカージョン参加者と議論することができた。身近な国内の森林への見方は、地域、国の「森林哲学」、 「森林思想」とも言えるものであって、国際的な規模での森林資源への見方・考え方にもつながる姿勢、考え方のベースとして重要である。持続的な森林の利用を可能とする健全な森林観が必要であると思われる。

## 第4回 IUFRO マツさび病部会国際会議を終えて

森林総合研究所 金子 繁

ユフロのセッション2にある「マツさび病部会(ワーキングパーティー)」(S2-06-10)の第4回国際会議が平

成6年10月2日~4日まで筑波大学学生会館で開催された。

この会議は4~5年おきに各国で開催され、前回(1989年)のカナダ、バンフでの会議でアジアでは初めての日本での開催が要請された結果だった。「マツさび病部会」としての会議は4回目だが、以前には「white pine」, 「hard pine」ごとにグループが分かれ、それぞれマツさび病問題について国際的に大きな足跡を残してきていた。

会議の時期が国際的にも経済状態が落ち込んでいる時期であり、マツが重要な北米、欧州から、遠い日本にどれだけの参加者があるか不安があったが、同伴者も含め、カナダから9名、米国から7名、中国5名、韓国3名、フィンランド2名、スウェーデン2名、ロシア1名、ポーランド1名、計30名が参加し、日本からもほぼ同数の参加者があった。

実行委員会では、形式的なセレモニーよりも、実質的な会議時のディスカッションの時間や、参加者がじかに語りあえるようにエクスカージョンの時間を十分に取るように計画したが、これは参加者の多くに好評であった。

エクスカージョンを含む会議の概要は次のようである。

10月2日 参加登録

10月3、4日 開会、講演発表

IUFRO日本委員会議長の小林一三森林総研所長、および部会長の米田南東林業試験場 E.G. Kuhlman の歓迎挨拶に続いて、Y. Hiratsuka (カナダ)、D.R. Vogler (米国)、E.G. Kuhlman らによる3題の基調講演があった。一般講演は病原菌の分類・分布、生態と生理、疫学、抵抗性、遺伝と分子生物学、林分の管理と防除など6つのセッションについて、計29題の発表があった。中国からの4人の参加者はビザが間に合わず、前日でも来れるかどうか分らなかったにもかかわらず、最後には1題のキャンセルもなかったことは驚きでもあった。他の分野でも盛んであるが、分子生物学的手法により、病原菌の系統関係、個体群の比較を行う研究が新しい道を開きつつあるのが実感された。一方で、発疹さび病菌の胞子の飛散で教科書でも多数の引用がある van Arsdell による pinyon pine における被害発生時の胞子分散に関する最近の研究も注目された。

10月5日から7日には海外からの29名を含む40名

で大型バスを借り切りエクスカージョンに楽しく出発した。5日の午前中は筑波山周辺のスギ林と筑波神社の見学、気象研究所構内のマツ材線虫病の被害木の観察の後、森林総研の森林微生物科関係の見学を行った。昼食後は山梨県富士山麓の「富士桜荘」に向かい、夕食後このワーキングパーティーのビジネスミーティングを行った。その会では、今後は樹木さび病全体へグループを広げるため、グループ名を「Rusts of trees」とすること、次期のリーダーをカナダ北方森林研究所のY. Hiratsuka氏とすること、今回の会議をフィンランド森林研究所のJalkanen氏の熱心な勧誘によりフィンランドで開催することが決められた。

翌日は富士山奥庭付近で亜高山帯林の観察の後、諏訪の森アカマツ林のさび病を中心とする病害の観察、病害試料の採取などを行った。午後は富士浅間神社の社殿、古いスギ並木、さらに天然記念物「舞鶴の松」などの美しさを楽しんだ後、小淵沢のアカマツ林のなかに新しくできた壮大なホテル「リゾナーレ小淵沢」に到着した。ホテルでは山梨県主催の盛大な歓迎会が催され、青柳県林務部長、斉藤県森林総合研究所長を初めとして研究員の方々のお計らいで国際会議最後の晩のひとときを思い出深いものにすることができた。

翌日はそれぞれにアカマツ林の散策を楽しんだ後、増穂町に新しく建設された「山梨県森林総合研究所」を見学したが、木をふんだんに使った建物と設備の良さに海外の研究者も一様に驚きの声をあげていた。

見学後解散地となる東京に向かったが、エクスカージョンのフィナーレはバス中でのそれぞれの国のフォレスター関係の歌で締められ、次のフィンランドでの再会を誓いあった。

海外からの会議の参加者の誰もが、会議の成功とともに、日本の森林や田舎の景色の美しさ、人々の温かさをいろいろな表現で感激しながら語ってくれたのには実行委員長として何よりもホッとしたが、もっと病んだ森林があるのを見せる時間がなかったのは残念でもあった。

終わりに、会議の開催について大きなご援助をいただいた、山梨県林務部、山梨県森林総合研究所、つくば科学万博記念財団、国土緑化推進機構、茨城県科学技術振興財団、そしてユフロ日本委員会に対し心から感謝申し上げる次第である。



会議参加者による記念撮影

### これからの研究集会予定 (IUFRO News Vol. 23, No. 3 より)

#### IUFRO 研究集会

##### Division 1

P1.16-00 (生物多様性); S4.02-00 (森林資源量調査とモニタリング); Smithsonian Institute; MAB: Measuring and Monitoring Forest Diversity (森林多様性の測定とモニタリング) / May 23-25, Washington, D. C., USA

S1.04-02 (雪と雪崩); S1.04-00 (自然災害); S1.05-14 (山岳地域における造林問題): Excursion: Prevention of Natural Disasters and Mountain Silviculture (エクスカージョン: 自然災害の防止と山地林業) / Jul 31-Aug 4, Swiss and Austrian Alps

##### Division 4

S4.02-00 (森林資源量調査とモニタリング); ICRAF; ISTF: Inventory of Nontimber Forest Products (NTFP) (非木材林産物の資源調査) / Feb 19-23, Nairobi, Kenya

S4.02-02 (多目的資源量調査); ISTF: How to Gather, Evaluate, and Use Ethno-biological Data (民族生物学データの収集, 評価, 利用) / ?, Thailand

##### Other Meetings

Oxford Forestry Institute; International Institute for Environment and Development; SGS Forestry: Making Forest Policy Work (森林政策の策定) / Jul 3-7+10-28, Oxford, U.K.

### 木本の根の生理過程ダイナミクス 国際シンポジウム (S2.01-15 個体レベルの植物生理学)

根系植物学の基礎的側面と地下部生理機能への環境ストレスの影響に関するシンポジウムが開かれます。

主催: Boyce Thompson Institute for Plant Research US EPA Environmental Research Laboratory at Corvallis IUFRO Whole Plant Physiology

期間: 1995.10.8-11 (併催ワークショップ 1995.10.8)

場所: Statler Hotel, Cornell University Campus, Ithaca, NY, USA

テーマ: 根系の成長と発達

根系における同化物の割当と分配

土壌-根系-植物体連続系における水の流れ

養分の吸収と利用

根系微生物/菌根相互作用

根系過程のモデリング

併催ワークショップ分野: 現在のミニリフトロン手法

1) ミニリフトロン装置の操作 2) 根系ビデオイメージのデータへの変換 3) 統計分析を含むデータ処理 4) 現在の限界と発展可能性

連絡先: Dr. Mary A. Topa

Boyce Thompson Institute for Plant Research, Tower Road, Ithaca, NY, 14853-1801, USA

TEL: 607-254-1263 Fax: 607-254-1242

仮アブストラクト締切: 1995.2.1

印刷アブストラクト締切: 1995.7.1 (事務局)

## ◆ユフロ活動協力基金による助成募集◆

IUFRO-J News No. 18 に掲載されているユフロ活動協力基金特別会計運営要領に基づいて、平成7年度の助成希望者を下記により募集しますので、ご関係の会員の方は3月末日までに応募されるようお知らせします。なお助成者の決定は書類審査により選考し、申請者にお知らせします。

## ユフロ活動協力基金による助成募集要領

ユフロ活動協力基金特別会計運営要領第3条による助成を次の要領で募集します。

1. 助成の対象（運営要領第3条による）  
本基金の目的を達成するため、次の項目について旅費及び会議開催に要する経費の助成を行う。  
(1) ユフロが開催する世界大会、分科会、及び専門研究会等の研究会への出席。  
(2) ユフロ理事会への出席及び同評議員会への日本代表としての出席。  
(3) 我が国における上記(1)、(2)の会議の開催
2. 助成を受ける資格  
ユフロ-JのA、B会員機関に所属、登録されている研究者およびC会員。
3. 応募の手続き  
3月末日までに、次年度内に予定されている集会について、様式(A)または(B)によって申請書等を作成し、財団法人林業科学技術振興所々長(〒102 東京都千代田区六番町7 日本林業技術協会別館)あてに提出する。  
ただし、他に助成を申請中、または公費出張応募中の場合にはその旨を添え書する。また会議開催費の助成申請については、助成を希望する項目と金額を明記する。
4. 選考  
書類審査により助成者を決定し、申請者に通知する。
5. 助成の内容  
会議参加については、1件の助成額は原則として30万円を限度とする。会議開催費についてはその都度検討する。
6. 報告書  
助成を受けたものは、会議終了後1か月以内に集会の概要(400字詰、10枚程度)をまとめて林業科学技術振興所々長(前掲)あて提出する。
7. 決定後の辞退  
会議参加の場合、助成決定後でも、公費あるいはそれに準ずる他の助成がえられた場合は、本基金の助成を辞退願うものとする。なお、辞退者があった場合には、選考に洩れた申請者のうち、次位のものを経上げて助成する。

申請用紙、(A、Bとも)はIUFRO-J事務局ならびに林業科学振興所に備えてあります。

## 機関代表会議のご案内

平成6年度ユフロ-J機関代表会議を下記のように開催しますのでお知らせします。

## 記

- 日時：平成7年4月4日(火) 12:00~13:00  
場所：北海道大学 クラーク会館集会室1号  
議題：1) 平成6年度事業報告  
2) 平成6年度会計報告  
3) 会計監査報告  
4) 平成7年度事業計画  
5) 平成7年度予算案  
6) その他

各機関には万障お繰合せのうえ、御出席下さるようお願いいたします。

IUFRO-J News No. 54 平成7年3月10日

〔編集・発行〕

国際林業研究機関連合日本委員会事務局  
茨城県稲敷郡峯崎町松の里1 森林総合研究所内  
TEL 0298-73-3211 (232)